



ハローサマー、グッドバイ / Hello Summer, Goodbye (1975) / マイクル・コニイ(千葉薫訳) / サンリオ(文庫・9/5刊・¥420)

ひと夏の間、少年は両親とともに、南部の漁港で休暇を過ごす。そこで、彼は、ブラウンアイズという名の、少女と出会う。だが、遠い戦争の影は、この町にも及んでいた……。

これだけ書くと、普通の少年小説ともとれるだろう。事実、本書から感じ取れる雰囲気は、それに近いものだった。しかし、コニイの描くのは、遠い宇宙の彼方にある、自然も生態系も違う、異星の物語であり、主人公たちも人間と似た異星人なのだ。最後には、SF的な結末もついている。なぜ、わざわざSF仕立てにしたのか、結末にちよっと疑問が残る。だが、SFと少年小説の結合は、本書の流れのうえで、さほど違和感を与えていない。

コニイは、現代イギリスSF界の中堅作家である。これまで、全く紹介されなかったが、本書などで、ようやく翻訳がはじまった。ひと夏の間、少年が大人へと変わる、そんなさわやかさははらんだSFが、このコニイの持ち味だろう。精神的成長と無縁な、ハイน์ラインのジュヴナイルとは、根本的に違う。イギリス風の、落ち着いたSFを求める方にコニイをおすすめしたい。(俊)